二〇二二年度　同朋大学　一般選抜1期（A方式）　国語　問題用紙

【注意事項】

一、　試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないこと。

二、　設問 一 現代文は共通問題である。全員解答すること。

三、　設問 二 現代文と設問 三 古文は選択問題である。いずれか一方を選択し解答すること。

四、　解答は、解答用紙に記入すること。
（設問 一・二 用、または、設問 一・三 用のいずれかを使用する。）

五、　「始め」の合図とともに、解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入すること。

〈共通問題〉

一　次の【Ⅰ】と【Ⅱ】の文章を読んで、後の問いに答えよ。

【Ⅰ】

歴史は、世界を空間だけに沿って見るものではなくて、時間に沿って見るものだ。その時間をどう認識するかは、人間の集団ごとに、ひじょうに違う。

去年のことでも、三年まえのことでも、百年まえのことでも、ただ「むかし」というだけで区別しない人たちもいれば、今日の午前に起こった事件と、あとの午後に起こった事件の時間の差を問題にして、区別する人たちもいる。A時間の認識のしかたは文化なのである。

時間の観念は文化だから、文明によって、社会によって、おおいに違う。また違って当然だ。（　①　）、時間の管理のしかたも、文明によって違ってくる。

時間を一定不変の歩調で進行するものだと考えて、日・月・年に一連番号を振って、暦を作り、時間軸に沿って起こる事件を暦によって管理して、記録にとどめるという技術は、きわめて高度に発達した技術であって、人類が自然に持っているものではない。

時間と空間の両方にまたがって、人間の世界を説明する歴史というものも、自然界にはじめから存在するものではなくて、文化の(a)リョウブンに属するものである。歴史は文化であり、人間の集団によって文化は違うから、集団ごとに、それぞれ「これが歴史だ」というものができ、ほかの集団が「これが歴史だ」と主張するものと違うということも起こりうる。

しかも、暦を作って時間を管理することと、記録をとることだけでは、歴史が成立するのに十分な条件にはならな

い。

B歴史の成立には、もう一つ、ひじょうに重要な条件がある。それは、事件と事件の間には因果関係があるという感覚だ。これこれこういう事件は、時間ではそのまえにあったこれこれこういう事件の結果として、あるいはその影響で、起こったというふうに考える。

これは、この世界で起こる事件は、それぞれ関連がある、あるいはあるはずだと考えることだ。こういう考えかたは、現代人、ことに日本人のあいだでは、ごくあたりまえの考えかただけれども、実は世界のなかでは、人類のなかでは、どうも少数派の感じかた、考えかたらしい。

ここで念を押すと、直進する時間の観念と、［　C　］と、文字で記録をつくる技術と、ものごとの因果関係の思想の四つがそろうことが、歴史が成立するための(b)ゼンテイ条件である。言いかえれば、こういう条件のないところには、厳密な意味の「歴史」は成立しえないということになる。現に世界の文明のなかには、歴史という文化要素がまったくないか、あっても弱い文明がいくらもある。

そのなかで、Dもともと歴史というもののない文明の代表はインド文明だ。インドには、ひじょうに古い時代から都市生活があって、王がいて、政治があって、文字の記録があって、商業、工業、その他の産業が盛んで、富も(c)チクセキされていた。それにもかかわらずインドには歴史という文化は、ごく最近までまったくなかった。

インド人が歴史を意識するようになったのは、厳密に言うと、一八五八年に、最後のムガル皇帝が(d)ハイイされて、イングランドのヴィクトリア女王がインド皇帝になってからである。

（　②　）、東インド会社から大英帝国がインドの(e)トウチをひきついだ時点から、インドの歴史がはじまるということになる。それから後は、ヨーロッパ的な常識で言う歴史の見かたで、インドという世界を扱うことができる。

実はそれ以前のインドでも、日付のある記録はあることはあるが、それも十三世紀までしかさかのぼれない。十三世紀のはじめに、北インドのデリーに「奴隷王朝」と呼ばれる、イスラム教徒のトルコ人とアフガン人の政権ができ

た。そのときからあとは、歴代の君主の在位期間や、政治的な事件の記録があるようになった。

インド文明にはもともと、歴史という文化要素がなかったところへ、イスラム文明が歴史を持ちこんだといえる。そういうわけで、インド文明全体としては、歴史は支配的な文化要素にはならなかったけれども、十三世紀から十九世紀まで、インドの支配階級はイスラム教徒だったから、その範囲ではイスラム的な歴史が理解されていた。

（　③　）、インド文明は、あれほど起源が古く、水準が高かったにもかかわらず、歴史という文化がなぜ発達しなかったか。それはインド文明に特有な転生（魂の生まれ変わり）の思想から来ている。

日本に伝わった仏教用語で説明すると、衆生（生物）は、その形によって、「六道」という、六種類の存在に分かれる。「天」（神々）、「阿修羅」（悪魔）、「人間」、「畜生」（動物）、「餓鬼」（幽霊）、「地獄」の六種類の衆生がある。

天の神々から地獄の住民に至るまで、それぞれ長い短いの差はあるけれども寿命があって、寿命が尽きると、魂が死体を抜け出して、七七、四十九日の間「中有」（中間的存在）に在って、中有の期間が終わると、つぎの生物に生まれ変わる（転生する）。このサイクルが「輪廻」である。

この輪廻・転生の思想は、インド文明に固有のもので、仏教にかぎらず、ジャイナ教も、ヒンドゥー教も、この思想が基本になっている。

（　④　）、この輪廻の思想では、来世でどんな種類の生物に生まれ変わるか、また生まれ変わってから、どんな生涯をたどるかは、(f)今生でどんな行為（業）を積んだかによって決まる。前世が原因で、今生が結果、今生が原因で、来世が結果、と考えられている。

こういう輪廻・転生の思想が基礎にあるところに、歴史家が生まれたとする。そこで歴史を書こうと思いたっても、技術的に不可能だ。人間界のできごとだけを記録してみても、人間界のできごとは、人間界の範囲内だけで因果関係が成立しているわけではない。人間界のある事件は、天上界の事件の結果かもしれないし、魔界の事件の結果かもしれないし、動物界の事件の結果かもしれないし、お化けの世界の事件の結果かもしれないし、地獄界の事件の結果か

もしれない。

そういうように、人間である歴史家の目のとどかないところで起こった事件まで(g)カンジョウに入れなければ、人間界の事件の因果関係はたどれないことになる。つまり人間界だけに範囲をかぎった歴史は成り立たない。だから、輪廻・転生を否定するイスラム教が入ってくるまで、インドには歴史という観念がなかったわけだ。

その上に、時間の流れの受け取りかたが、文明によって違うという問題がある。輪廻・転生という思想の基本には、E、という感覚がある。時間をこういうふうに感じるところでは、時間軸に沿って、物事の(h)スジミチを語るという、日本や西ヨーロッパのような歴史のある文明で、歴史が果たす重要な機能が成り立たない。

そのためにインド文明では、目のまえの現象の説明に神話が使われる。(　⑤　)、この世界は、(i)イダイな神の夢のなかの世界だ、とか、神のある気まぐれが、この地上のあるできごとを引き起こす、とかいう具合に、神話と現実とが直結してしまう。インド文明で、神話と現実、宗教と日常生活、神々の世界と人間界が密接に関連しているのは、そういうところから来ている。

そういうことで、世界の文明には、歴史のある文明だけでなく、歴史のない文明というものもある。歴史が成立しない原因のうちで、おもなのは、時間の観念の違いと、因果関係の観念のあるなしということになる。

（岡田英弘『歴史とはなにか』による）

【Ⅱ】

F歴史小説はフィクションであるが、歴史家の叙述する歴史もまた、フィクションではないものの、「物語」にはなってしまう。なぜなら、現実に起こった歴史をそのまま知ることは不可能だからである。歴史家は様々な(j)ショウコ

をもとにして、時間的展開のある出来事を言葉で語るのであって、完全に客観的な叙述にはならない。出来事Aと出来事Bをつなげて書くだけでも、そこに因果関係を作り出すことになるし、何を書いて何を書かないかも歴史家は選択しなければならない。歴史小説のような完全なるフィクションとの境目は程度問題である。

（橋本陽介『物語論　基礎と応用』による）

問一　波線部(a)「リョウブン」、(b)「ゼンテイ」、(c)「チクセキ」、(d)「ハイイ」、(e)「トウチ」、(g)「カンジョウ」、(h)「スジミチ」、(i)「イダイ」、(j)「ショウコ」を、それぞれ漢字に直せ。

問二　波線部(f)「今生」の読みを、ひらがなで答えよ。

問三　空欄（　①　）～（　⑤　）にあてはまる語として適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えよ（番号は重複できない）。

1　つまり　　2　たとえば　　3　ところで　　4　では　　5　だから

問四　傍線部A「時間の認識のしかたは文化なのである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　地球上に生きる人類にとって、時間の経過は常に一律であり、個人の感覚を超越したものだということ。
2　時間の感覚は、人それぞれでばらつきがあり、しかも、その時々の気分によっても変化するということ。
3　時間の区分や記録は、文明が発達するにつれて、大雑把な状態から緻密な状態へと進化するということ。
4　時間という概念を理解し、集団の中で活用するためには、土台となる科学的な知識が必要だということ。
5　時間のとらえ方は、先天的なものではなく、個々の社会の中で習得され、共有されるものだということ。

問五　傍線部B「歴史の成立には、もう一つ、ひじょうに重要な条件がある。それは、事件と事件の間には因果関係があるという感覚だ」とあるが、この「感覚」とはどのようなものか。その具体例として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　「王女が疫病にかかり亡くなった」という出来事を、「この王女は、前世で何か重大な罪をおかし、それが原因となって疫病にかかって亡くなったに違いない」ととらえるような感覚。
2　「王が亡くなった」という出来事と、そのすぐ後に起こった「王妃が男の子を出産した」という出来事を結びつけ、「王妃が産んだ男の子は、王の生まれかわりだ」とするような感覚。
3　「A国のB王は〇〇年に亡くなった」というある史料の記録と、別の史料の「A国のB王は毒殺された」という記録から、「A国のB王は〇〇年に毒殺された」と判断するような感覚。

4　「A王は神への祈りを怠っていた」「A王は若くして亡くなった」という二つの記録から、「A王が若くして亡くなったのは、神への祈りを怠っていたためだ」と推測するような感覚。

5　「A国の軍がB国を攻撃した」「攻撃の前年にA国の王が軍を増強した」という二つの出来事から、「A国の王は、B国への攻撃を、その前年から計画していた」と考えるような感覚。

問六　空欄［　C　］にあてはまる語句として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　空間を認識する方法　　2　歴史を生み出す熱意　　3　時間を管理する技術

4　輪廻・転生の世界観　　5　高度に発達した文化

問七　傍線部D「もともと歴史というもののない文明の代表はインド文明だ」とあるが、なぜインド文明には歴史という文化がなかったのか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　十三世紀のはじめにイスラム教徒の政権ができた際、支配階級となったイスラム教徒が、インドの古い時代の記録をすべて破棄してしまったから。

2　十九世紀にヴィクトリア女王がインド皇帝になった後、インド文明に歴史を持ちこんだイスラム文明が、徐々にインドから排除されていったから。

3　インドでは古い時代から都市生活が発達し、そこで商業や工業が盛んに行われたため、人々がほかの国々と接触する機会がほとんどなかったから。

4　インド文明には、人間の世界で起こった出来事の原因は、必ずしも人間の世界の範囲内だけにあるとは限らないという特有の世界観があったから。

5　インドでは昔から、神話と現実、宗教と日常生活、神々の世界と人間界が密接に関連し、目の前の現象を説明するために神話が使われてきたから。

問八　空欄 E にあてはまる文として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　時間の流れには限りがなく、常に一つの方向に向かって一定の速さでどこまでも進んで行く

2　時間は直線的に無限に進行するものではなくて、くりかえしくりかえし原初にもどるものだ

3　時間の感じ方は、輪廻によって生まれ変わるそれぞれの世界の時間軸によって異なっている

4　生き物が異なる世界に生まれ変わったとしても、時間の流れは途切れずに永遠に続いている

5　時間を計測する方法として、月の満ち欠けにもとづく太陰暦を唯一のよりどころにすべきだ

問九　傍線部F「歴史小説はフィクションであるが、歴史家の叙述する歴史もまた、フィクションではないものの、「物語」にはなってしまう」とあるが、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　どんなに歴史にくわしい人物でも、歴史家自身が実際に起こった過去の出来事を直接見聞きしたわけではないので、自分の知らない部分をフィクションによって脚色することは、どうしても必要になるから。

2　小説家が、読者の興味をひくために歴史小説のストーリーを考えるように、歴史家が歴史を叙述する場合にも、その歴史を読む人々を意識して、過去に起こった出来事の因果関係を作り出すことになるから。

3　歴史小説が作家の主観によって叙述されるように、歴史家が歴史を叙述する場合にも、客観的な事実のみを叙述することは不可能であり、そこには多かれ少なかれ歴史家自身の主観が入り込んでしまうから。

4　歴史小説も、小説家が歴史的な事実を客観的に叙述したものであるという点では、歴史家が叙述した歴史とまったく同じであり、両者をどう区別するかは、それを読む人の側の主観的な判断に過ぎないから。

5　歴史家が叙述しようとする過去の出来事は、それが古い時代のものであればあるほど、神話や宗教との関わりが強く、どこまでが現実でどこからが非現実の出来事であるかの判断が、容易にはできないから。

問十　次の１～５は、【Ⅰ】と【Ⅱ】の文章を読んだ五人の学生の会話である。１～５の中で、【Ⅰ】【Ⅱ】の文章の内容を正しく理解している意見を二つ選び、番号で答えよ。

１　（学生１）「【Ⅰ】には、歴史を成り立たせるためには、出来事と出来事の間に因果関係を考えることが必要だと書かれているけど、その点では【Ⅱ】の文章も同じ見方をしているね。」

２　（学生２）「そうかな。【Ⅰ】にはたしかにそう書いてあるけど、【Ⅱ】には、因果関係を作り出すことは客観的な叙述にならないから、歴史家はそれを避けるべきだと書いてある。」

３　（学生３）「二人とも違うよ。【Ⅰ】【Ⅱ】ともに、歴史を叙述するときに、出来事の因果関係を考える場合もあるとは書いてあるけど、それはあくまで歴史家自身の選択だからね。」

４　（学生４）「ちょっと違う点で意見を言わせてもらうけど、【Ⅰ】も【Ⅱ】も、歴史の叙述というものが、結局はフィクションであるという点では、同じ考えだね。」

５　（学生５）「そうは読みとれないよ。ただ、【Ⅰ】ではふれていないけど、【Ⅱ】からは、歴史の叙述が出来事の因果関係を作り出すものであるかぎり、完全に客観的な歴史というものは存在しないという考えが読みとれるね。」

〈選択問題〉

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

多くの現代人は、科学的検討の結果得られた物理学的時間以外の客観的時間である「時計の時間」を想定している。この時計の時間は一定の速度で過去から未来に向かって進行し、それぞれの瞬間は特定できるものとして想定されている。この時計の時間は、物理学や哲学における時間の概念以上に我々の社会的生活に影響を及ぼしている。たとえ物理学や一部の哲学が時間は実在しないと主張しても、我々の生活が時計の時間から解放されるということはこれまでなかった。

［　Ⅰ　］に基づいて、人間は世界に共通の時間、「世界時」を作り出した。実際には、世界中に配置された原子時計の平均値に基づいて世界共通の時間（「協定世界時」）が決められ、我々は様々な手段でそれを参照することができる。

このように、世界共通の時計の時間とは協定で決められたもの、［　Ⅱ　］取り決めである。こうした時計の時間の特徴が世界についての物理学的理解や時間概念の論理的整合性から導き出されてきたものではないことは、物理学や哲学における時間の特徴を(a)カエリみれば分かるだろう。時間を、進行したり特定の時点を持つものにしているのは、物質の特性や時間の概念ではなく、我々の体験の特性や、それに基づく人間の社会活動であると言える。では、我々の体験における時間はこの時計の時間と対応しているのだろうか？　答えは否である。

実験心理学が明らかにしてきた心的時間は物理学や哲学における時間とも時計の時間ともずいぶん異なるものである。時間の長さに関する感じ方の特性と、知覚認知における時間的制約について紹介しておこう。

A体験される時間は、様々な要因によって伸びたり縮んだりする。たとえば、身体の代謝が盛んであるほど体験さ

れる時間は長く感じられる。これは、時間の長さの認知の基礎にあると想定される「内的時計」の「針」が、身体の代謝が激しい状態ではより速く進むためと考えられている（ただし、このような針を持った「時計」が脳内で特定されているわけではない）。子供の頃に比べると大人は同じ時間をより短く感じる。このことも「内的時計」の進み方と関係がある。子供に比べると成人では代謝が低下しており、それと対応して内的時計もよりゆっくり進む。そのため、自分の感覚と比較すると、時間が速く過ぎるように感じられ易い。また、同じ個人内でも、代謝の状態によって時間の感じ方が変化する。たとえば、朝の起床直後の時間帯は代謝が低下しているため、代謝の上昇する昼間頃と比べると、時間が短く感じられる。運動や入浴、病気で発熱した際には代謝が上昇するので、時間が長く感じられ易い。

時間の経過に対する注意も体験される時間に強く影響する。時間の経過に注意が向けられる頻度が高いほど時間が長く感じられる。そのため、待ち遠しいイベントがあったり、時間の経過を常時気にする必要がある作業を行なう場合には、時間が長く感じられる。「早く終わってほしい」と時間を気にするほど、つまり(b)タイクツな会議や授業ほど、心理的時間は長くなってしまうのである。逆に、時間経過に注意を向け難くさせる要因は時間を短く感じさせる。たとえば、意識の集中を必要とするような難しい計算問題（時間経過に注意が向く回数は減るだろう）などを遂行する際には時間が短く感じられる。

出来事の数も主観的時間の長さに影響する。同じ時間間隔であっても、その間に多くの出来事が気づかれるほど時間が長く感じられる。経験された出来事の数が多いほど心理的時間は長くなるのである。

これらの要因以外にも、視覚や聴覚といった他の知覚様相への刺激や、感情状態も主観的時間の長さに影響を及ぼす。こうした要因は、それぞれが独自のメカニズムに基づいて体験される時間に影響を及ぼすと考えられている。

目の前に何かが現れた時、瞬時にそのものが見えているように感じるだろう。しかしながら、知覚の情報処理には一定の時間が必要である。たとえば、(c)モウマクが光で刺激されてから大脳皮質の視覚野まで情報が伝達され、視覚的な体験を引き起こすのに〇・一秒ほどの時間が要ると考えられている。さらにこの処理時間は様々な要因によって

変化する。

たとえば、一般的に、刺激強度が強いほど、処理に要する時間は短い。二つの物体が同時に目の前に現れた場合でも、モウマク像がより明るい物体、大きい物体ほど先に現れたように見え易い。

注意は処理過程を促進する。たとえば視覚に関しては、注意を向けた領域とそこから離れた場所とに同時に物体が現れた場合、注意を向けた領域の物体の方が先に現れたように見える。この特性を利用すると、〇・一秒ほどの時間差で提示された刺激の時間順序を知覚的にひっくり返すことができる（B知覚のタイムマシン効果）。たとえば、二つの光点を相次いで提示する際、後に提示される光点の位置のあたりにあらかじめ注意を惹きつけておくと、物理的には先に提示された光点よりも後から提示された光点の方が先に現れたように見える。

このように、体験される時間は様々な要因の影響を受けて長くなったり短くなったり、速く進んだりゆっくり進んだり、順序が入れ替わったりする。他方、時計の時間には、過去から未来へと向かって一方向に均一に進行するという特性が付与されている。体験における時間と時計の時間との間には(d)乖離があり、その乖離の程度は様々な要因の影響を受けて変動する。

ここで重要なのは、体験される時間がデタラメに変動しているわけではないということ、体験における時間と時計の時間との間の乖離には一定の規則性があるということである。心理学は各個人の体験における時間特性を扱うが、そうした特性の多くは種としての人間によって共有されている。したがって、これらの特性における規則性を理解できれば、両者の間の乖離を再現したり強調したり、あるいは、(e)カイヒすることが可能になると考えられる。

体験される時間と時計の時間との間に乖離があるという人間の知覚認知特性は、地上で、歩いたり走り回ったりという生活様式のもとでの進化の過程で獲得されたものと考えられる。そのため、これまで通りの生活の中では、このような時間の乖離が何らかの不具合につながるようなことはほとんど(ア)ない。しかしながら、現代では、これまでの進化の過程では経験の(イ)ない生活の高速化や公共の時間としての時計の時間への厳密な従属を求められがちである。

○・一秒という些細な時間でさえ、かつてなかったほど重要なものとなっている。人間と時間との関係に新たな事態が展開しつつある現代においては、体験される時間と客観的時間との間にどのような乖離があるかを知ることは重要な意味を持つ。

物理学的な時間、哲学的な時間だけではなく、時計の時間を含む客観的時間は理念的、概念的なものであって、我々人間の持つ時間的制約や体験の時間特性から導かれたものでは(ウ)ない。時間を人間にとって意味あるものにしているのは、時間の物理学的特性や概念的整合性ではなく、人間自身の体験の基本構造や身体的制約の方である。人間は一定の時間のうちに(f)セッショク、カイヒ、休息などの行動を行なわなければ生きて行け(エ)ない。さらには、時間的に有限で、いつかは死ぬ存在である。人間は、自然への適応や社会生活における個々人の間の行動の調整のために、一方向に均一に進行する時計の時間を(g)ソウシュツし、利用しているものと考えられる。つまり、時計の時間、客観的時間とは、時計と同様、人間の発明品、道具と見ることができる。

時計の時間という道具に合わせて生活することで人間の側に不都合が生じるとしたら、それはC道具の方に問題があるということだろう。時間を道具と考えれば、道具に人間を合わせるのではなく、人間の側の制約や限界を理解し、それらに合わせて道具の使い方を変えたり、道具自体を改変することで人間と時間との関係における可能性が今より開かれたものとなるだろう。そのような試みのためにも、体験される時間の特性についてのさらなる解明と周知が重要と言える。

（一川誠「体験される時間と客観的時間」による）

問一　波線部(a)「カエリ」(b)「タイクツ」、(c)「モウマク」、(d)「乖離」、(e)「カイヒ」、(f)「セッショク」、(g)「ソウシュツ」のカタカナはそれぞれ漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

問二　二重傍線部（ア）～（エ）の「ない」の中で、文法的なはたらきが異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問三　空欄 Ⅰ にあてはまる語句として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　時間は哲学や物理学からの考察とは関係なく進むという思考
2　時間は実在するかしないかにかかわらず進むという法則
3　時間はどこでも誰にとっても同じように進むという信念
4　時間はいかなる状況においても相対的に進むという想定
5　時間は協定を結ぶことによって各国で個別に進むという理解

問四　空欄 Ⅱ にあてはまる語句として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　哲学的　　2　社会的　　3　生物的　　4　人間的　　5　科学的

問五　傍線部A「体験される時間は、様々な要因によって伸びたり縮んだりする」とあるが、その例として適当でないものを、次の中から二つ選び、番号で答えよ。

1　成人は子供と比較すると集中力が弱まっているため、子供の頃に比べ、大人は同じ時間をより短く感じる。
2　何かが次々に起こる間隔が同じでも、その間に多くの出来事が気づかれるほど、時間が長く感じられる。
3　意識を集中しないと正解が導き出せないような難しい計算問題を遂行する際には時間が短く感じられる。
4　朝起きたばかりには代謝が低下しているため、代謝の上昇する昼間頃と較べると、時間が短く感じられる。
5　時間は実在しないものであると考えると、注意が向く回数が減ってくるため、時間がより短く感じられる。

問六　傍線部B「知覚のタイムマシン効果」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　ある人に見える物が必ずしも自分自身に見えるとは限らない。
2　先に見えた物が必ずしも先に現れた物であるとは限らない。
3　過去に見えた物が必ずしも現在も見えるとは限らない。
4　明るく見える物が必ずしも注目されている物体とは限らない。
5　今見えている物が必ずしも存在しているとは限らない。

問七　傍線部C「道具の方に問題があるということだろう」とあるが、道具に問題がある場合、どうすればよいと言っているか。本文中から二十五字以内で抜き出せ。

問八　次の選択肢の中から、問題文の内容と合致するものを二つ選び、番号で答えよ。

1　客観的時間は、人間が作り出した道具であるから、使い方を学ぶ必要がある。
2　心的時間は、主観的時間であり、物理学的には存在しないものと考えられる。
3　哲学的な時間は、物理学的に測定された時間をもとに考えられたものである。
4　客観的時間は、時計と同じで、人間が作り出した道具と考えることができる。
5　時計の時間は、協定により作られた時間であり、一定の普遍性が認められる。
6　心的時間は、哲学的に考えると実在する場合と実在しない場合が認められる。

〈選択問題〉

三　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂※注といひける人は、唐土にわたりて、帰り来ける時に、船に乗るべきところにて、かの国人、(a)馬のはなむけし、別れ惜しみて、(b)かしこの唐詩作りなどしける。A あかずやありけむ、二十日の夜の月、出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂のぬし、「わが国に、かかる歌をなむ、神代よりも神もよん給び、今は上中下の人も、かうやうに、分かれ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば(c)春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞよめりける。かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、(d)男文字にさまを書き出だして、ここのことば伝へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、B いと思ひのほかになむめでける。唐土とこの国とは、C ことことなるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

さて今、その(e)かみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ　I

（『土佐日記』による）

※注　阿倍仲麻呂　奈良時代に遣唐留学生として唐に渡ったが、海難のため帰国できずに生涯を終えた。

問一　点線部(a)「馬のはなむけ」、(b)「かしこの」、(c)「春日なる」、(d)「男文字」、(e)「かみ」の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

(a)「馬のはなむけ」

1　馬の世話　　2　祝いの宴　　3　送別会　　4　天候占い　　5　乗船準備

(b)「かしこの」

1　聡明な　　2　昔からの　　3　恐れ多い　　4　その国の　　5　小難しい

(c)「春日なる」

1　春の陽光が差す　　2　春日という　　3　春日にある

4　春日である　　5　春日になる

(d)「男文字」

1　楷書体　　2　草書体　　3　平仮名　　4　片仮名　　5　漢字

(e)「かみ」

1　歌を詠んだ神　　2　歌の書かれた紙　　3　土佐国の守

4　むかし　　5　身分の高い人

問二　傍線部A「あかずやありけむ」とあるが、その解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　扉が開かなかったのだろうか　　2　会が終わらなかったのだろうか

3　満足しなかったのだろうか　　4　失敗したのだろうか、いやそうではない

5　夜が明けなかったのだろうか、いや明けた

問三　傍線部B「いと思ひのほかになむめでける」を現代語訳せよ。

問四　傍線部C「ことことなるものなれど」とあるが、その解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　言葉は違っているが　　2　それぞれ重なっているが　　3　仰々しいものであるが

4　国は異なっているが　　5　どちらも長い歴史を持っているが

問五　空欄 Ⅰ に当てはまる語句として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　いでよ　　2　いづれ　　3　いるれ　　4　いる　　5　いれ

問六　本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　都では山の片隅で月を見ていたが、大海原では月は海から出るのであった。
2　船旅で大海原にいると、月は海の波に浮いているように見えるのであった。
3　月の光は唐土も日本も同じであるが、それを見る人の心は同じではない。
4　「ある人」は、阿倍仲麻呂の和歌を漢詩に作り替えて唐土の人に伝えた。
5　月を見て故郷を懐かしく思う感覚は阿倍仲麻呂も「ある人」も同じである。

問七　二重傍線部「ある人」には、この作品『土佐日記』の作者が想定される。

（一）その人物名を漢字で答えよ。

（二）その人物が編纂に関わった勅撰和歌集を、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　和漢朗詠集　　2　古今和歌集　　3　新古今和歌集　　4　万葉集　　5　凌雲集